

平成 22 年 5 月 14 日現在

研究種目：基盤研究（C）  
 研究期間：2007～2009  
 課題番号：19520698  
 研究課題名（和文） 東南アジア大陸部シャン民族における文字文化の継承と実践についての人類学的研究  
 研究課題名（英文） Anthropological Studies on the Inheritance and Practice of Written Culture among the Shan in Mainland Southeast Asia  
 研究代表者  
 村上 忠良（MURAKAMI TADAYOSHI）  
 大阪大学・世界言語研究センター・准教授  
 研究者番号：50334016

研究成果の概要（和文）：本研究では、東南アジア大陸部山地に分布するタイ系民族シャンの文字文化の継承の過程と実践の現状を考察し、以下の二点について明らかにした。第一点目は、近代国民国家成立以前の伝統的な文字知識の継承や運用形態について考察を行ない、知識の継承における在家知識人の役割を明らかにした。第二点目は、タイ国北部の泰緬国境地域では、仏教儀礼のなかでの文字知識の実践が近代国家成立後のシャン語の生き残りの戦略となっていることを明らかにした。

研究成果の概要（英文）：This research examines the process of inheritance and the practice of written culture among the Shan in Mainland Southeast Asia and shows the present situation of the Shan written culture as follows; first, the lay intellectuals, as well as Buddhist Sangha, play a significant role in the inheritance and practices of their written culture; second, the practice of written culture in Buddhist practices is the means for the survival of their written culture in the Thai-Myanmar border area of Northern Thailand .

交付決定額

（金額単位：円）

	直接経費	間接経費	合計
2007 年度	800,000	240,000	1,040,000
2008 年度	500,000	150,000	650,000
2009 年度	600,000	180,000	780,000
年度			
年度			
総計	1,900,000	570,000	2,470,000

研究分野：人文学

科研費の分科・細目：文化人類学・文化人類学・民俗学

キーワード：文化人類学、文字文化、シャン、東南アジア大陸部、タイ、ミャンマー、  
仏教実践

## 1. 研究開始当初の背景

東南アジア大陸部においては、タイ（シャム）、ビルマ、ラオ、クメールといった比較的人口規模が大きい民族が中心となって近代国民国家が形成されてきた。そして各国の多数派民族の言語が「国語」とされ、それを基盤として国民教育が行われてきている。しかし、このような中央政府の努力による「国語」の浸透と並行して、あるいはそれにもかかわらず、中央から地理的に離れた地方や少数民族の間には様々な形で地方語・民族語（以下、少数民族言語とする）が継承され、日常生活で使用されている。また、近年ではインターネット上に、少数民族言語の使用空間が出現しており、国家の言語理念とは別の次元の多様な言語使用の状況が存続している。本研究では、このような各国における「国語」の確立と国家領域全体への浸透や、その反対に日常生活における少数民族言語の使用や継承において、文字が果たす役割の重要性に注目する。

本研究で取り上げるシャンは、東南アジア大陸部の内陸山地に分布するタイ系民族で、タイ王国、ミャンマー連邦両国において少数民族と位置付けられ、各国の「国語」を受容しながらも、自らの言語を継承し、日常生活の中で使用してきた。但し、少数民族言語といってもシャン語は、その多くが文字を持たない言語であった「山地民」の言語とは異なり、タイ語やビルマ語と同様に長い文字使用の歴史と豊かな文字文化を有している。

東南アジア大陸部における諸国家の国民統合のプロセスの中では、多数派の言語が制度化された文字をもつ「国語」として再編成される一方で、少数民族言語が教育制度や言語政策の中で周縁化されていくという言語の二極分解が生じている。シャン語の特異性・独自性は、少数民族言語でありながら文字を保持し、文字を基盤に言語使用者の再生産ができるという点であり、制度化された「国語」と周縁化されていく少数民族言語の中間的な性格をもつことである。

## 2. 研究の目的

このようなシャン語、特にシャン文字文化を研究することによって、以下の二点を明らかにする。

(1) シャン語・シャン文字文化を事例に、東南アジア大陸部の諸国家における「国語」成立以前に見られた、この地域特有の文字文化の形態を明らかにする。マクロに見れば王権や仏教といった政治・宗教制度と文字文化

の関係について、ミクロに見れば地域社会における文字知識の伝承や実践の形態について、東南アジア大陸部の文字文化の研究に大きな知見を付け加えることができる。

(2) 少数民族言語が各「国語」の影響下で見せる新たな展開に注目し、国家の諸制度を通して浸透してくる「国語」に埋没せずに、少数民族言語が生き残る戦略を明らかにする。「国語」が浸透してくる間隙を縫うように行われる、少数民族言語の継承と使用の現状を明らかにする。また、「国語」の浸透は単に少数民族言語の周縁化をもたらすだけでなく、少数民族言語を継承していくためのモデルをも提供する。隣接する多数派民族の「国語」化の流れは、少数民族言語の中に表記法や教育制度の改善・印刷技術の導入などいわゆる近代国民国家の「国語」をスタンダードとする言語への志向性を生み出す契機となる場合があり、このような少数民族言語の近代化の過程にも注目する。

## 3. 研究の方法

シャン文字文化の継承と実践の研究を行うにあたって、次の二つの方法をとる。

(1) ミャンマー連邦とタイ国におけるシャン文字文化の継承の形態を明らかにするため、伝統的なシャン文字文化の実践を明らかにする。シャン人社会で高い価値が置かれているシャン文字知識の継承・実践形態に注目し、過去の偉大な作家（文人）の活動や、書物の筆写者という在地の知識人によるシャン文字文書の継承がシャン文字文化の中で持つ重要性を明らかにする。具体的には、ミャンマー・タイ両国のシャン人居住地域において継承されているシャン文字文書の使用形態、知識人の活動について調査研究を行い、その結果を分析する。

(2) 国家の諸制度を通して浸透する「国語」に埋没せずに、シャンの文字文化が継承されていく現在の継承過程を明らかにする。主としてタイ国北部のメーホンソーン県を調査地とする。メーホンソーン県は、ミャンマー連邦シャン州と隣接するタイ国北部の国境県で、タイ国内で最も多くシャン人が居住する地域で、人々の生活の中にシャン文字文化が継承されている地域である。特に国境に接しているという特殊な環境にも配慮しつつ、シャン文字文化の現状を明らかにする。

## 4. 研究成果

以下の二点を明らかにすることができた。

(1) 第一点目は、シャン文字文化の継承における伝統的な在家知識人の役割である。

従来の上座仏教社会研究では、伝統的な文字知識は僧院内での教育によって、サンガ（僧団）内で継承されるとされてきた。確かにシャンの場合にも、一時出家した男子・男性がシャン文字の教育を受けることで、その知識が次世代へと継承されていく。近代的な学校教育が導入される以前の東南アジア大陸部の上座仏教圏の社会では、文字知識とは、主として僧院教育を受けた男性に継承される「限定された知識」であった。特に男性の中でも、出家者である僧侶がその中心的な担い手であるとされている。

シャンの場合にもこの基本構造を共有しているが、本研究ではシャン文字知識の継承と実践は、サンガ内だけに限られたものではなく、在家信者の活動によっても支えられていることを明らかにした。一時出家時の教育経験をもとに、還俗後も文字知識の習熟と技能の向上に熱心で、十分な文字知識の運用能力を身につけた在家の知識人が重要な役割を果たしている。

現在、シャンの人々の間で「シャン文字の師」（クーモーリークタイ）と呼ばれ、尊敬される文人たちがいる。主として18世紀～20世紀前半にかけての人物たちであるが、これらの多くは男性で、一時出家時に教育を受け、還俗後は文字知識の専門家として著作活動に携わり、その作品が評価高く評価された文人である。彼らの著作は韻文で書かれた仏教解説書や説話などであり、現在においても写本の形で継承され、特に仏教関連の書物は「リーク・ロン」（大きな書物）と呼ばれて、仏教儀礼で朗読される。このリーク・ロンの朗読を聞くことは、僧侶の説法を聞くのと同様に「功德を積む」ことができるとされている。また、リーク・ロンは仏教儀礼の際の供物ともなり、僧侶・見習い僧の出家式や葬儀・死者供養儀礼の際には欠かすことはできないとされる。

リーク・ロンを含めたシャン文字写本を筆写したり、儀礼のときに朗読したりするのは、チャレーと呼ばれる在家の知識人の役割である。チャレーとはビルマ語で「書記」という語が語源で、文字知識の専門家という意味である。但し、チャレーとなるためには、シャン文字の知識に加え、シャン文化に大きな影響を与えているビルマ語、仏教の聖典語パーリ語などの知識を身につけていることが必要である。さらに、チャレーは写本の朗読も行うので、韻文の構造を正確に理解して正しく流暢に読み上げること、聴き心地のよい声をしていることなど、朗読の技術も有している必要がある。

シャン文字知識は「限られた知識」であり、社会の成員すべてが有しているわけではないが、チャレーの活動はシャン文字写本で書かれた著作の世界を一般の人々に媒介し伝

達する役割を担っている。シャン文字写本の著作の多くが韻文で書かれているのは、文字を直接読めない人々にも、朗読して聞いてわかるようにするためであり、文字文化は口頭の技術によって広く社会に開かれ共有されることになる。

チャレーは、筆写作業により文字文化の容器である写本を物質的に再生産し、後世へと継承する。また朗読によりそのコンテンツを一般の人々に馴染み深い口頭の世界へと媒介する役割を担っているといえる。

(2) 第二点目は、主としてタイ国北部のタイーミャンマー国境付近のシャン人居住地域での調査を行い、タイ国内におけるシャン文字文化の継承の現状を、特に国境地域の人々の実践から明らかにした。

タイ国北部のシャン系住民は、タイ国内のタイ系少数民族という立場にある。タイ系諸語の一つであるシャン語を話し、上座仏教徒で、伝統的に水田稲作民であるシャンは、同じタイ北部に居住するチベット・ビルマ系の焼畑耕作民である「山地民」と比較すると、タイ国社会への同化が進んでいるとされる。タイ国生まれで、タイ国の学校教育を受けたシャンの子弟たちにとっては、「シャンである」と、「タイ国民である」とは相反せず、自らのアイデンティティとなっている。シャン文字文化に関して言えば、一時出家慣行が簡略化していることや、またタイ国サンガの中央集権化にともなったタイ語による仏教教理教育が普及することで、僧院内教育がシャン文字知識を伝承する場となっていない。そのため、タイ国北部の泰緬国境地域では、日常生活では依然としてシャン語を使って生活をしているのでシャン語の会話能力は継承されているが、シャン文字の知識の若い世代への継承は困難な現状にある。

一方、近代的な国境成立以降から現在に至るまで、戦乱からの逃避、開拓地の希求、より良き賃金など、さまざまな理由からミャンマー連邦シャン州とタイ国北部との間の人の移動は継続している。特に第二次大戦以降では、シャン人を含む多くの「少数民族」が、ミャンマー側からタイ側に流入している。

本研究では、このような人の流れに沿って、シャン文字の知識もタイ国内に持ち込まれていることを明らかにすることができた。タイ国内でのシャン文字知識の再生産が難しくなっている状況下では、シャン州から流入してくる在家知識人がタイ国北部の国境地域でシャン文字文化の担い手として中心的に活動し、タイ国内生まれのシャン人の文字文化継承を支援している。国家の教育制度等に依存しない、東南アジア大陸部の国境を越えた民族文字知識の継承の可能性を、タイ北部のシャンの事例は示している。

このようなミャンマー側からタイ側へのシャンの人の流れは、在家信者にとどまらず、僧侶にも見られる。タイ国内での仏教サンガの中央集権化により、サンガは地方から中央へと階梯を上がる形で組織化される。シャン系の僧侶でもタイ国サンガ内での地位上昇を考えると、伝統的なシャン仏教の知識よりも、タイ語によるタイ国サンガ標準の仏教教理を習得する必要がある。また、タイ国全体に見られる傾向として、学校教育の発展により、伝統的な一時出家の慣行による僧院内教育よりも、学校教育のほうが重視されるため、僧侶のなり手の減少が見られ、タイ国北部の泰緬国境地域でも同様の状況にある。

現在、タイ国籍を有するタイ国生まれのシャン人の子弟のなかで、僧侶として出家するものの数が減少している。さらに、たとえ長期間出家する僧侶がいたとしても、そのような僧侶はタイ国サンガの組織内での高い地位を志向する傾向があり、その関心はバンコクやチェンマイなど国家の中心を向いている。そのため、村落部の僧院に定着する僧侶が一層減少し、村落部僧院の僧侶の過疎化が進んでいる。本研究の調査地では、ミャンマー側から移住してきたシャン人僧侶が、そのような人手(僧侶)不足の僧院に止宿し、人々の宗教生活を支えている現状を観察することができた。このような、僧俗の違いを超えて見られるミャンマー側からタイ側への知識(の担い手)の移動は、現在の泰緬国境地域の状況を表している。

上記の(1)(2)の点を総合して、以下の点を指摘することができる。シャン文字知識は、国家の教育制度として整備されることなく、伝統的に一部の知識人が担う「限られた知識」であった。但し、一部の知識人の担う文字知識は閉ざされた知識人のサークル内に限定されるものではなく、筆写による写本の作成、口頭での朗読によって、シャン文字文書を専門的な文字知識を持たない一般大衆へと媒介するものであった。このような「限定されつつも社会に開かれている」という文字知識の存在様式は、近代国家成立以降のタイ国北部でも同様である。

タイ国家への統合過程のなかで、多くのタイ国生まれのシャン人がタイ語識字能力を備える一方で、シャン文字知識の継承者が減少していく現状がある。そのため一見、国家に同化される少数民族の消え行く伝統的知識とみなされがちであるが、元来シャン文字知識は、上述のとおり少数の知識人に担われた「限られた知識」であるという点では、大きく変化をしているわけではない。変化が生じているのは、タイ国内の僧院内教育で知識の継承が難しくなっており、知識の継承者は国境を越えてやってくる人の移動に依存しているという点である。

重要な点は、比較的同化が進んでいると考えられるタイ国北部のシャン人の間でも、シャン文字で書かれた写本を重要な供物の一つと考え、写本の朗読を聴くことが功德を積むことであると考え一般大衆のシャン文字文化への態度が存続しており、それに支えられて、シャン文字文化が継承されているという点である。その意味で、タイ国北部におけるシャン文字文化はタイ国内では周辺化されて担い手は少数の知識人に限定はされているが、国家(タイ国政府)によって保護しなければ消滅するような「絶滅危惧種」の文字文化ではなく、タイ国北部の国境地域のシャン人社会の中で依然として必要とされ、活用されている、現在進行形の知識である。

##### 5. 主な発表論文等

(研究代表者、研究分担者及び連携研究者には下線)

[雑誌論文] (計3件)

① Tadayoshi Murakami, 2009, “*Lik Long* (Great Manuscripts) and Care: the Role of Lay Intellectuals in Shan Buddhism”, in M. Kashinaga (ed.), *Written Cultures in Mainland Southeast Asia*, *Senri Ethnological Studies* 74, pp. 79-96. (査読有)

② 村上忠良, 2009, 「国境の上の仏教—タイ国北部国境域のシャン仏教をめぐる制度と実践」林行夫(編)『*境域*の実践宗教—大陸部東南アジア地域と宗教のトポロジー』京都大学学術出版会、pp.171-234. (査読無)

③ Tadayoshi Murakami, 2008 “Anthropology, Thai Studies in Japan, 1996-2006”, in *Thai Studies in Japan, 1996-2006*, the Japanese Society for Thai Studies, pp. 81-147. (査読無)

[学会発表] (計2件)

① 村上忠良, タイ北部におけるシャン系移住者の過去と現状、日本タイ学会、第11回研究大会、京都大学、2009年7月4日。

② Tadayoshi Murakami, “Anthropology, Thai Studies in Japan, 1996-2006”, 10th International Conference on Thai Studies, Thammasat University, Bangkok, Thailand, 9<sup>th</sup> Jan. 2008.

6. 研究組織

(1) 研究代表者

村上 忠良 (MURAKAMI TADAYOSHI)  
大阪大学・世界言語研究センター・准教授  
研究者番号：50334016

(2) 研究分担者

なし

(3) 連携研究者

なし